

金山取材20年-報道記者の記録

森永満郎¹⁾

はじめに

筆者は1981(昭和56)年から、2003(平成15)年まで、20余年にわたって報道記者として、鹿児島で金山と広域・精密調査の取材を担当してきました。今回、広域・精密調査の終了、退職を機に20余年の取材と報道の記録を振り返ってみました。

金山取材の20年、それはまさに楽しい夢を追いつけた20年でもありました。また「なぜ新金山発見のニュースが出なかったのだろうか」という不思議さが残る20年でもあり、「昔の人は偉いものだ」という思いを新たにされた20年でもありました。

20年の記録と思いを「金山取材20年-報道記者の記録」としてここに取りまとめてみました。なお、登場する方々の肩書きは当時のものです。

1. 最後のレポート

【2003年3月13日】

— NHK鹿児島放送局ローカルニュース『さきどり情報かごしま』での記者レポート。女性キャスターの呼びかけで始まりました。

キャスター 各地の取材拠点と結んでお伝えするふると発信、きょうは川内報道室と結んでお伝えします。森永さん、前回、ひと月前のこの時間に北薩地区で金山探しが行われているという話題でしたが、その結果はどうだったのですか。

記者 新たな金の鉱脈は見つかりませんでした。国が行う金山探しは広域調査と精密調査という二つがあり、鹿児島県では、広域調査が川内市と樋脇町で、精密調査が大口市で行われました。二つの調査を締めくくる現地検討会が串木野市、菱



写真1 屋外でのボーリングコア検討会にてインタビューに応じる井澤さん(『さきどり情報かごしま』。提供NHK)。

刈町と場所を移しながら今月9日に行われ、最終的に確認しました。

—ここから映像が映し出され記者の語りが続きます。

記者 金山探しのボーリング調査です。大口市では精密調査が行われました。金属鉱業事業団が担当する国の金山探しはまず広域調査を行い、有望なところを絞り込んで精密調査へと移り、さらに見込みができれば、企業探査、そして金山開発へと進むのです。精密調査では、800mから850mと広域調査の2倍の深さまで掘り下げました。掘り出した岩石、ボーリングコアは菱刈町に集められ、今月9日に大学や研究機関の専門家による現地検討会がありました。金が含まれていそうな部分をサンプルとして取りだし、金や銀が1トンあたり何グラムの割合で含まれているかを分析しています。100万分の1の世界です。分析結果と現物を見比べて吟味します。水晶のような白いところにギザギザの空洞があります。金の粒子を運ぶ高温のお湯が流れたあとです。金の鉱脈はこういうところにあると考えられていますが、見つかりませんでした。広域調査

1) ミツロー事務所

キーワード: 日本一の産金県, 露天掘り金山, 青化精錬法, 金の回収, 広域調査, 精密調査



写真2 ポーリングコア検討会にてインタビューに応じる森下さん(『さきどり情報かごしま』, 提供NHK)。



写真3 『さきどり情報かごしま』でキャスターの問いかけに応える筆者(提供NHK)。

は川内市と樋脇町で行われ、そのポーリングコアは串木野市に集められました。

— 九州大学 井澤英二名誉教授へのインタビュー(写真1)。

井澤 ポーリングの中から50個ほど、サンプルを選んで分析した結果が出ています。そのうち、少しは金が来ていると言えるのが1カ所だけで、これが1.3グラムというまあ、普通は10グラムぐらいあれば、なかなかいい金が入ったいい石だとなるのですが、1.3グラムですと、そのホントにぎりぎり、『金があるね』というそういう値なんです。希望の出る結果にはなっていないということです。

金の含有量の多いことで世界的に有名な菱刈金山は安山岩を貫いて、四万十層の中で見つけました。四万十層には金はないといわれて来ただけに、菱刈金山の発見は広域調査の成功というだけでなく、金山の歴史で画期的な大発見だったといえます。検討会はより広い区域からポーリング地点を絞り込むまでの経過を含め、それぞれが意見を述べ合い、調査を締めくくりました。

鹿児島県では金鉱山基礎調査、それに続く広域調査へと35年間におよぶ国による金山探しが行われてきました。参加者から鹿児島、とりわけ北薩での広域調査の歴史とその成果を記録する提案が出て、これまで調査に携わった人たちにも呼びかけることになりました(编者注:地質ニュース本特集号)。

— 産業技術総合研究所 森下祐一研究グループ長へのインタビュー(写真2)。

森下 広域調査は長い間、続けてこられました。その中で菱刈鉱床の発見がありました。しかし、発見

に至らない調査であってもですね、鹿児島県の地下の地質は非常にわかるようになりました。そういった物は、一つの知的資産としてですね、非常に重要な意味を持っていて、それは後世にも残していく必要があると思います。

— まとめのコメント(写真3)。

記者 国家的な事業として行われてきた金山を探す広域調査はこれで終わりました。企業なども費用を負担する精密調査も平成18年度で終わり、金属鉱業事業団が培ってきた地下資源を探す探査技術は今後、海外で生かされることになるということです。

これが20年余りにわたる私の最後の金山ニュースレポートになりました。

2. 金山との出会い

私は鹿児島大学水産学部漁業経営学専攻課程を1965年に卒業しました。卒業はしたものの、すぐには希望するマスコミへ進めず、筑豊の炭鉱で5ヶ月間、採炭作業員をしながら機会を待ち、その年の11月、NHKに入局しました。

NHKの記者となって、鹿児島、宮崎、佐賀の伊万里通信部を経て、福岡の飯塚通信部に3年間勤務して、旧産炭地、もう炭鉱はなくなった筑豊炭田の地域を取材しています。

ふるさと鹿児島を希望して、川内市に赴任したのは、菱刈金山発見の翌年、1981(昭和56)年8月でした。菱刈金山は開発の準備段階から1983(昭和58)年4月の開鉱へと取材は続き、菱刈金山開鉱のその年に「鹿児島の金山は今」と題して、初めての金山レポートを放送しました。

3. 金山の開発と株

【1983年5月18日】

キャスター 東洋一の金山かと噂されておりまして、新しい金山の開発が伊佐郡菱刈町で進んでおりまして、日本一の金の生産県、鹿児島は今、全国から注目されています。金山の周辺を森永記者が取材しました。

— このようなキャスターのリードで始まり、一人の人物の顔が大写しでです。

記者 昭和最後の相場師といわれている大阪の是川銀蔵さんです。去年1年間の所得を28億9千万円と申告して、長者番付日本一となりました。土地を売ったわけでもなければ、大会社のオーナーでもないこの人がおもうけしたのは株でした。それも今話題の金山株でした。その舞台となったのは伊佐郡菱刈町です。

金属鉱業事業団が、菱刈町山田地区で有望な金鉱脈が見つかったと発表したのは、一昨年5月でした。住友金属鉱山が、企業化に乗り出しますと、それまで、200円台だったこの会社の株の値段は2倍3倍とはね上がり、去年4月には1,200円台、今年2月には1,600円台へと急上昇し、その過程で異色の億万長者が出現したのです。住友金属鉱山菱刈鉱山では先月15日に開鉱式があり、300m余り掘り進んでいます。来年の春か、夏には、1,000mの長さになって、鉱脈に届き、金の鉱石が出てくるということです。金の推定埋蔵量を120トンと発表している会社は、ものになるかどうかはその時になってみないとわからないのですと、慎重に構え、坑道の撮影も入り口からだけです。住友の1km西側では、もう一つの大手鉱山会社、三井金属鉱業もボーリング調査をして、金山ブームに拍車をかけています。ここも株価操作の材料にされてはかなわないと関係者の口は堅く、テントの中では機械の音だけがせわしげです。

この金山ブームは大企業が開発に乗り出したというだけではなく、鹿児島県が昔からの金の産地で、今も5、6カ所で操業が行われている全国一の金の生産県だからです。鹿児島県の西海岸の中央にある、マグロ漁業の基地、串木野市には、日本一の金山があります。300年余り、掘り続けている三井串木野鉱山です。二つの山を掘って、年間700

キログラム近い金を生産しています。全国の金山からの生産量が1.6トンといえますから、全体の40%余りを出していることとなります。日本一といっても従業員は200人余り、切り羽、つまり鉱石を掘り出す現場では、削岩機で穴を開け、ハッパをかけ、そして砕けた石を運び出す作業は、1人か2人ぐらいで行っているのです。鉱山では鉱石を掘り出す作業と一緒に、新しい鉱脈に向けて坑道を伸ばす作業も進められています。金を多く含む鉱脈が目の前にあっても、そこだけに集中しないで、品位の高い所と低いところを混ぜ合わせて採掘し、全体的に生産量を平均化させながら、山の寿命を延ばす努力が続けられています。

串木野の北東30キロ余りの薩摩郡薩摩町には、江戸時代から昭和28年まで続いた永野金山の跡が残っています。閉山して30年たった今も、ここで働いていた人たちが年に1回、会合を開いております。今年も今月1日に十数人が集まりました。昔を忘れられない人の中には、この金山の跡にはまだ、多くの金が眠っている。なんとか掘り出してみたいものだと語る人もいました。そして新しい技術を使えば、まだまだ鉱脈は見つかるだろうし、もう掘り尽くされたと考えられている金山でも、もう一度よみがえるかもしれないと、菱刈での開発に力づけられているのは、行政機関の鹿児島県です。鉱脈を調べる事業に、もっと力を入れるように国に働きかけることにしています。金の話には憶測が憶測を呼ぶ部分も多くて取材を拒否されたり、ひどく警戒されたりして、気骨が折れました。そうした中で、今の金山ブームは、一獲千金を狙うのではなく、長い見通しで金山開発を考える絶好のチャンスという山の人の話が心に残る取材でした。

この取材を通して感じたことは、マスコミ不信、「マスコミはそんなに信用されていないのか」ということでした。このレポートの後の金山ニュースは菱刈鉱山関連が中心でした。菱刈鉱山は坑道を下へ下へと掘り下げていく過程で、わき出る大量の温泉水をくみ出して、地下水の水位を下げ、坑道を掘り下げていきました。そのころ近くの川内川の両側に並ぶ菱刈町の湯之尾温泉で地盤沈下が起きました。原因がはっきりしないまま、金山開発との関係も取りざたされました。菱刈鉱山も大勢のマスコミ

の取材を受けることとなります。菱刈鉱山の酒井九州男鉱山長とは、その前から顔見知りになっていて、ニュースになるような話題はなくても、時々訪ねて雑談を交わすこともしばしばでした。雑談の中で「本当に、こちらで取材することがそんなに株価に影響するものですか」と聞いたとき、「こちらではわかりけど、兜町や北浜ではものすごい影響があるんですよ」と鉱山長は話していました。

4. 記者レポートへの道

そのころの金山ニュースはその日の出来事を伝える単発、いわゆるデイリーニュースだけで、記者が直接語る、「記者レポート」はなく、それも菱刈金山の開発に伴うものだけでした。それでも、構想だけは次第に膨らんでいました。菱刈金山だけが鹿児島島の金山ではないという思いと深く結びついていました。菱刈金山が開鉱に向けて作業が進む中で、報道機関とはお互い理解し合う必要があると考えた菱刈鉱山の酒井九州男鉱山長は、地元記者クラブとの忘年会を兼ねた懇親会を大口市で開催しました。総勢20人ほどの参加でした。記者クラブの面々と酒井九州男鉱山長を中心にした話がにぎわう中で、席の片隅には鉱山の幹事役が物静かに控えておいででした。交換した名刺は「菱刈鉱山囁託」という肩書きで、星原春雄とありました。星原さんから杯を酌み交わしながら雑談を進める中で、「銀は入れ歯を加工する銀を使う歯科医院から、金は使わなくなった電子部品を分解して回収しているのですよ」という話を聞きました。金山リポートの大枠は出来上がっていましたが、もう一つ模索していた最後の締めくくりがこの話で決まりました。

年が改まって、1986(昭和61)年正月、新しく金山専用の取材帳を用意しました。大口市の事業所にまず、星原さんを訪ねました。そこで紹介されたのは、山下 忠さんでした。名刺には鯛生鉱業株式会社代表取締役社長とありました。

「ボーリングで掘り下げていったら、『堅い地層に当たり、先端のビットが折れてしまった。ボーリングは中止したい』と言ったのを『だめだ、契約通りやってくれ』と私が言った」と菱刈鉱山発見の様子を山下さんは私に話してくれました。その時はそれで終わりましたが、これはずっと記憶に残り、後にな

って、もう少し詳しく聞いて、確認しておけば良かったと思出すことでした。

菱刈鉱山の鉱区権は鯛生鉱業から住友金属鉱山に移り、開発が行われたことも聞きました。菱刈町には昔、山田鉱山という金山があったこと、地下水の関係で坑道を下げることができずに閉山したこと、いずれ開発の時期が来ると考えながら、鉱区権は住友金属鉱山の子会社、鯛生鉱業が温存していたことなどを聞いたように記憶しています。

山下さんがその時、「この人を知らない」と鹿児島島の金山関係者としてはモグリだと紹介して下さった方が池田富男さんでした。池田さんの名刺の肩書きは鯛生鉱業株式会社大口鉱業所顧問、名刺を交換した日付は1986(昭和61)年1月8日となっています。池田さんは鹿児島の金山の歴史や全体像を話して、「鹿児島大学の浦島先生に会いなさい」と勧めて下さいました。

鹿児島大学教養部の研究室に浦島幸世教授を訪ねたのは、1月11日でした。浦島教授は菱刈金山発見について「あれは日本の金山の歴史の大事事件だった。それなのにマスコミの取り上げ方は小さかった」と話されました。「マスコミは騒ぎすぎ、書きすぎ、大げさだ」という話を聞かされることが多い中で、初めて聞く「菱刈金山発見をマスコミは過小評価している」という言葉でした。

5. 鹿児島から全国へ

【1986年1月21日～24日】

NHK鹿児島のローカルニュースで3分間ずつの連続4回で金山シリーズをレポートしました。数日後には、その4回分12分を3分にまとめて、夜九時の全国ニュース、NC9(写真4)で放送されました。

キャスター 急落を続ける原油価格、その背景と日本での影響を探ります。推定埋蔵量が東洋一という、日本最大の金の産出県、鹿児島島の金山を取材しました。金は現在では90%近くを輸入に頼っています。しかし国内でもいろいろな方法で金の採掘が行われておりまして、特に全国一の金の産出県、鹿児島では、推定埋蔵量が東洋一といわれる金山の本格的な操業も始まりました。鹿児島からお伝えします。



写真4 鹿兒島のローカルニュースが編集されて、夜9時からの全国ニュースNC9で放送された『金山シリーズ』の冒頭(提供NHK)。

第1回 東洋一の新金山菱刈金山

— 最初に菱刈鉱山の鉱山長室に飾っている高品位鉱石のアップの映像からはいり、金の自然の状態の様子をみてもらい、採掘現場を紹介しました。

記者 金の鉱石です。鉱石1トン中金の含有量は11キログラム。めったに出るものではありません。鹿兒島県はかつて、金山が60カ所ぐらいいましたが、今は5カ所です。それでも全国の3分の1です。金の採取量は年間3トン余りで、全国一の産出県です。新しく仲間入りした菱刈鉱山は採掘を始めて半年たちました。坑道の一番奥が切り羽です。黒い岩肌に白く見えるのが金の鉱脈です。鉱石1トン中の金の含有量は平均160グラムと言いますから、やはり大変な金山です。

第2回 最長の歴史 三井串木野金山

鹿兒島県に放送されたローカルニュースでは、2回目として三井串木野鉱山での採掘と青化精錬法の作業工程(本誌、中村 廉さんの記事参照)を紹介しましたが、全国ニュースでは時間枠の都合で割愛されて、3回目の赤石鉱山の露天掘り風景に移ります。

第3回 露天掘りの金山

記者 露天掘りの金山です。荒っぽく採石しているように見えますが、金山というところは1トンの鉱石中の金の量が1グラムも多いか少ないかが問題になるところです。100万分の1を大事にする精密工業の世界です。調べる鉱石を粉にして薬品と混ぜ合わせます。溶解炉で溶かします。2回目に炉から出ると、金の粒一つだけが残ります。その粒の大きさで、鉱石の金の量がわかります。これは近代的な鉱石の分析の方法です。鉱石を調べるもう一つの

方法は、昔ながらの碗がけです。砕いた鉱石をお碗に入れて、水に浸します。ゆらゆら揺すりすると、重い金の粒子が1カ所に集まります。手軽な方法としてこのヤマでは今も行われています。

第4回 リサイクル工場に变身した金山

— 旧鯛生鉱業大口鉱業所だった大口精金で、電子部品のスクラップの映像からはいります。

記者 今や金は鉱石からだけ製錬されるものではありません。元の金山の跡に作られたこの会社では、鉱石の代わりにICなど、電子部品のスクラップが集められています。金の精錬と同じ工程の後、溶鉱炉からドロドロにとけたものを鋳型に取り出します。これを冷やして、カラミという不純物を取り除きますと、これがなんと純金です。こうして国内でとれる金は日本で使われる量の14%で、大半は輸入にたよっていますが、鹿兒島県では、新たに有望な金鉱脈も見つかっており、地元ではかつての黄金ベルト地帯の復活に期待が高まっています。

鹿兒島の金山は菱刈だけではない、ほかにもあるし、そのことで全国一の産金県なのだ。なにかあってから騒ぐから混乱し、誤解も生ずる。日頃から金山の本当の姿を学び、記録し、そこから始めようと考えて取りかかった取材に、鉱山の人々からは期待した以上の協力をいただき、予想を遙かに超えた出来映えだった、といまでも考えています。そのことが次への取材へと駆り立てることになります。金山発見は偶然ということもあるのだろうが、やはり地道な努力が大事、その地道な努力を取材し、伝え、記録しようというのが金山取材の20年でした。情報公開、開かれた形でその取材を受け入れてもらえた事が長期間の取材へと繋がっていききました。

6. 広域・精密調査を追って

【1986年9月27日】

キャスター 全国一、金が取れる鹿兒島県でさらに、新しい金山を見つけようと国は調査に力を入れています。鹿兒島放送局の森永記者が報告します。

記者 去年7月から操業を始めた鹿兒島県菱刈町の住友金属鉱山菱刈鉱山です。1日に200トン近い鉱石を掘っています。1トンの鉱石に100グラムの

金が含まれていますので、毎日20キログラムの金が出ることになります。この有望な金鉱脈を確認したのが、5年前、金属鉱業事業団の広域調査によってでした。金鉱脈を探す金属鉱業事業団の広域調査は、今年も鹿児島県内の2カ所で行われています。金鉱脈を探す方法の一つが電気探査です。一定の場所から電気を流し、場所を変えながら測定し、地図に電気が流れやすいところと、流れにくい所を天気図のように、描いていきます。

— 鹿児島大学 浦島幸世教授へのインタビュー(写真5)。

浦島 地下には電流を通しやすい所と通しにくいところがありますから、それによって、等高線を描くことができるわけです。もう一方、場所によって重力も違いますのでそれも等高線によって図面が出来るわけです。昔のように偶然発見すると言うことに、出来るだけ頼らないで、現在私たちが持っている、技術や考え方を組み合わせて、広い範囲から絞り込んでいきますから、調査範囲の中にもしも金のあるところがまだ残っているとすれば、これは逃さない。

記者 国内で現在操業している金山は6カ所です。その4カ所は鹿児島県にあります。これまで60カ所の金山があったという鹿児島県は、これからも発見に最も期待がもてる地域といわれ、こうした地道な調査が資源の少ない日本にとって欠かせない調査となっています。

金属鉱業事業団の広域調査の取材はその後も続きます。電気探査の外に、重力探査、地震探査の様子などを映し出しました。

【1987年9月30日】

キャスター 全国一の金山地帯、鹿児島県では、国の委託を受けまして金属鉱業事業団が、毎年地質調査を続けているんですが、今年は始良郡蒲生町で、人工地震を利用した金鉱探しが行われました。森永記者がお伝えします。

記者 菱刈町の住友金属鉱山菱刈鉱山は発見当初から大きな話題になりました。創業に入って2年間余りの間に17万トンの鉱石を掘り出し、15トンの金を精錬していますから、1トン当たりの金の含有量は90グラム、やはりずば抜けて品位の高い金山で



写真5 鹿児島大学の研究室で取材を受ける浦島さん(現:鹿児島大学名誉教授、提供NHK)。

す。菱刈金山はもう一つの点でも注目されました。

浦島 菱刈の金があるところは古い地層、四万十層といいますけど、ここから金が見つかったということが注目点です。今まで北薩ではこうしたところから見つかったことはなかったんですから、これから後、金を探すのには、四万十層の表面がどういうところにあるのかというのが一つの目安になったのです。

記者 菱刈金山の発見で金属鉱業事業団の広域調査は弾みがつき、以前から調べている始良郡蒲生町で、今年は先月中ごろから、地震の波を使って地下の様子を探っています。地震探査というこの方法は、もっぱら石油を見つけるのに使っていますが、金鉱脈を探すのは九州では初めてです。地震の波が地中を伝わる時、地層が変わるところでは曲がったり、跳ね返ったりする性質を利用します。
— 起震車の映像が映し出される。

記者 これはインパクトという機械です。地震の波を利用するといいますが、地震が起きるのを待っているわけにはいきませんので、これで人工的に地震を起こします。おもりのようなもので地面をたたいて振動を起こし、その波が地下から跳ね返ってくるのを地上の電極で受信します。この地震波は特殊な信号に変えて、コンピューターを使って画像処理します。病院で体中を調べる、あのCTスキャンの映像に似ています。地下の断層撮影ともいえるこの方法で深さ1,000mまでの地層を1.7kmにわたって調べます。

浦島 今回の調査では、火山岩層と四万十層との境がどこにあるかということがわかると思います。ですから他の調査です。地質調査とか、地化学探査とか、電気探査とか、ボーリング調査とか、そう



写真6 現地でインタビューに応じる調査責任者の佐藤さん(現:石油天然ガス・金属鉱物資源機構理事、提供NHK)。

いうデータを総合して、地下の様子を探って、金のありそうな範囲を絞っていくということになります。

菱刈金山のあるところは四万十層という地層がマグマが下から押し上げたようになっていて、もう一つの金山地帯、串木野市でも最近、四万十層の盛り上がりが目目されました。第二の菱刈金山を抱く四万十層はどこか、地震の波を使っての調査の狙いはそのへんにあるようです。鹿児島では宇宙に向けて次々にロケットが打ち上げられていますが、足元の地下深い所にも、もう一つの科学技術の目が向けられています。

【1989年3月2日】

キャスター 有望な金鉱脈がある鹿児島では金属鉱業事業団による新しい金山探しの広域調査が行われています。先日行われた調査に責任者として現地を訪れた佐藤 彬広域課長に鹿児島の金山の将来性や国の方針などについて森永記者が聞きました。

— 全国の金山の状況について、との記者の質問に答える金属鉱業事業団 佐藤 彬課長(写真6)。

佐藤 そうですね、金山といわれているのは、だいたい5つか、6つくらいしかありません。そのうち4つが鹿児島県にあるという具合に、鹿児島県は金の宝庫と言っていいくらいですね。

記者 鹿児島は昔から金山が多いですね。

佐藤 そうですねえ、どういうわけか、地質学的にみても非常に特異な場所があるのではないかと見ているわけですけど。例えばですねえ、菱刈鉱山は昭和55年度、金属鉱業事業団のボーリングで見



写真7 ボーリングコア検討会で石英脈の性質を調べる田口さん(福岡大学教授)と、熱心に討論する検討員(提供NHK)。

つけたわけですけど、菱刈鉱山の一番大きな鉱脈があるところは、四万十層群といいまして、そうですね、今から6千万年から8千万年以上昔の地層が下にあるわけですけど、その中に非常に金が多いということが、ボーリングでわかりまして、そういうためにはどういう調査が必要かと、いうことであるような電気探査とか、あるいは地震探査という方法がありまして今年度、蒲生町西小川地区で測線約10km位、地震探査をやっています。

記者 金の鉱脈を探すのに、電気探査とか、ボーリングというのは、割合よく知られているんですけど、地震探査というのは金鉱脈探しに利用したことは……。

佐藤 今まではありませんねえ、地震探査は地震の波を地層の境界に反射させる方法と、屈折させる方法と2通りあるんですが、今回の場合は反射法といいましてですね、地層の境界面で地震の波が反射する性質を利用するという探査法ですね、これは全国的に、金山についてはこちらが初めてですね。

このように大きな期待感の中で調査は続き、そうした雰囲気を変えながら、取材も続いていきましたが、毎年の事だけに、同じ内容だけではニュースとしては、つらいものもあり、新たな展開を模索します。一つは精密調査であり、もう一つは調査そのもの、別の角度からの意義付けでした。

【1994年1月27日】

キャスター 日本一の金の産出を誇る鹿児島県、新しい金山を探す国の調査が進んでいます。鹿児島県は菱刈、串木野など県内5カ所で金山が操業



写真8 現地駐在の調査責任者としてインタビューに応じる木田さん(現:石油天然ガス・金属鉱物資源機構総務企画グループ調査役, 提供NHK)。



写真9 鹿児島県の鉱業担当者として長年に渡り調査を見守ってきた前野さん(提供NHK)。

しています。日本一の金の生産県なんですが、まだまだ金が埋蔵されている可能性は大です。新しい金山誕生を目指して国の調査が進んでいます。川内通信部の森永記者が調査に同行しました。

— 記者との対談。

キャスター 森永さん、国の調査というのは今まで広い範囲だったのが、今年からかなり限定して、深く掘る精密調査というのにも入ったんですね。

記者 はい、広域調査と同時並行というかたちで、特に有望な地域、これ4年計画なんですけど、1年を締めくくる現地検討会というのが、菱刈町で行われました。それを取材しました。

— 菱刈金山の高品位鉱石の黄色く光る部分を映し出して。

記者 これはですねえ、金の鉱石なんです。これが全部、金というわけではないんですけど、それでも、これはですねえ、金が特別多い鉱石です。自然の中の金の様子がよくわかりますねえ。金属鉱業事業団はですね。他にも金の鉱石がどこかにあるはずだと、金山探しの調査を鹿児島県でも行っています。広域調査は始良町で行われています。もう一つは菱刈町と吉松町で精密調査というのが行われているのです。金山を探すということは金が入っている石を探すことですから、こうして石を(ボーリングで)掘り出しています(写真7)。

— 金属鉱業事業団 木田祥治北薩支所長へのインタビュー(写真8)

木田 ここは菱刈鉱山という大きな鉱山の近くです。菱刈鉱山だけでなく、周辺にもかなりの金が、地下にあるのではないかとということがこれまでの調査でかなりわかっていますので、今回精密調査と

いうことでより細かなデータを得るという事が目的で調査を現在やっているわけです。これはいい結果が出ればですね、新たな金鉱山というものも出来るという可能性は十分あるのではないかと思います。

記者 話は変わりますが、金の鉱脈は実は火山や温泉に関係があるのです。遠い昔、火山や温泉、地球環境はどうだったのか、それがわかれば、別の金山探しの方法も出てくるのです。この調査はそういう研究にも役立っています。

— 通産省地質調査所 森下祐一主任研究官へのインタビュー

森下 四万十層という堆積岩がありまして、その上で火山活動があり、溶岩が流れ、温泉活動があったわけなんです。その中でこういった白い石英などが沈殿した訳ですけど、そういった、我々の見ることができない昔の環境を、こういった小さな鉱物を実験室で分析することによりまして、金の鉱床は一体その環境のどこにあったのか、あるいは金鉱床にとどまらず、当時の地下の状況ですね、温度は一体どれくらいだったのかを知ることができるんです。

キャスター いまのようなお話を聞いていますと、鹿児島も火山も温泉も多いですからね、ますます金が出るんじゃないかという希望が膨らんできますよね。

記者 こういう地球規模の話とは別に、地元には別の期待もあります。

— 鹿児島県商工振興課 前野昌徳鉱政係長へのインタビュー(写真9)。

前野 金鉱床が新しく見つかって第2の菱刈鉱山が興ることで地域の活性化に繋がるということを期待

しておるわけですけど、例え見つからなくても、地質のデータとか、物理探査のデータとかは県の財産になるとわれわれは考えています。こういう調査が行われることは非常にありがたいことと思っています。

【1995年1月31日】

キャスター 次は夢のある金鉱脈探しの話題です。新しい金山の開発を目指しまして、鹿児島県では今金属鉱業事業団による調査が行われています。

— 中略。

記者 ここは菱刈町の調査地点です。地中を掘るボーリングの場所です。今回の調査では3カ所、半年かけてなんですけど、700mから1,150m掘りました。一つの地域の重力を見たり、電気を流したり、いろいろな方法で地下の様子を探るんですけど、決め手になるのはやはり岩を掘り出して直接、調べることです。

キャスター 有望なところでの精密調査ということですが、期待に応える結果がでたのですか。

記者 ええ、ありましたね。これですけど、白い石。1トン当たりの金の含有量が64グラムとか、あるいは166グラム、そういった値が出たんですよ。金山の採算ラインは10グラムといますから、相当なものですねえ。ただ問題はどの程度の量があるかということなんですよねえ。

広域調査にしても、精密調査にしても、金鉱脈への期待感だけでは、ニュースとして取り上げるのが、ますます苦しくなってきた、別の角度からの視点を加えることで何とか継続を試みました。

そうした時に、またしても菱刈リポートでした。

7. 二つの現実直面

【1997年6月3日】

菱刈町の菱刈鉱山は操業を始めて12年で金の産出量が佐渡の金山を抜いて、名実ともに日本一大きな金山になり、今日記念式典が行われました。

住友金属鉱山菱刈鉱山は昭和60年7月から採掘を開始し、1カ月に12,000トン余りの鉱石を掘り出し、この鉱石から、650キログラム前後の純金が精錬されています。菱刈鉱山の産出量は先月まで83.1トンに達し、380年間で83トンを生産した新潟



写真10 発見時から日本一の埋蔵量を持つと目されていた菱刈鉱山だが、産出量として実際に日本一の金山となったのを祝う御輿(提供NHK)。

県の佐渡金山を抜いて名実共に日本一の金山になりました。菱刈鉱山ではこの記録達成を祝って、記念式典が行われて、山の男たち20人が重さ150キログラムの金鉱石を祭った御輿(写真10)を雨が降る広場に担ぎ出しました。

菱刈鉱山の中村建一鉱山長「地域と共に栄える金山にしようではありませんか」と挨拶し、くす玉が割られました。続いてお祝いののぼりなどを付けた10トントラック13台が金鉱石を満載して、精錬所行き船が待つ、加治木港へと向かいました。

その一方では、山はいつかは閉山するという現実直面して、寂しいニュースも伝えなければなりませんでした。

【1997年6月27日】

キャスター 先日、菱刈鉱山が金の生産量日本一になったという話題を伝えてもってもらいましたが、今日は申木野の金山の話題がそうですね。

記者 そうなんです。申木野の三井申木野鉱山、これはですね350年の歴史を持つ、日本の代表的な金山の一つなんですけど、最近掘るのをやめたいといった話を耳にしたものですから、10年ぶりに取材しました。あの時の金山とですね、今の金山、どう変わったのでしょうか、まず10年前の申木野金山をご覧下さい。

— 中略。

記者 青化精錬の施設は動いていました。鉱石から金と銀を取り出す作業は続いています。この製錬技術を生かして、電子部品から金を回収する作業を行っていました。それにしてもここでの金鉱石の採掘はどうなっているんでしょうね。

— 三井申木野鉦山 中村 廉管理部長へのインタビュー

中村 円高のせいで金の値段がずいぶん安くなりまして、この金の値段ではですね、掘りやすい所は掘り終わってしまっ、あとはコストの高いところの鉦石だけが残っているという状態ですから、金の値段が上がりましたら、またもう一度掘れますので、いつでも掘れる状態にはしています。またなんとかですね、早く掘れる状態になることを期待しております。

記者 それにしてもですね、全国、金山があるのは6カ所なんですよ。そのうち5カ所は鹿児島なんですよ。鹿児島では今は新しい金山探しの作業も行われていますからねえ、いつまた「新しい金山が見つかったよ」、そういうニュースを伝えることができたらうれしいですねえ。

8. フィナーレへ

このあとも1998(平成10)年、1999(平成11)年と年に一回ずつは、精密調査、広域調査のレポートは継続しました。

そして、2001(平成13)5月で、満60歳を迎え、NHK定年退職、引き続き、再雇用制度で契約職員として、取材活動は継続しました。定年前後の1年をはさんで3年間は金山レポートに空白が生じます。契約職員は5年間、希望すればさらに延長も可能でしたが、思うところあって、契約職員1年目の途中で、2003(平成15)年にNHKを辞める決意をしました。

【2003年1月6日】

— 正月恒例の取材は菱刈金山からの金鉦石の初荷です。

記者 東洋一の金山、菱刈町の菱刈金山ではきのうの雪が残る中で金鉦石の初荷を出して仕事を始めました。草田隆人鉦山長は「去年は暮れになって、鉦山にとって徐々に明るいニュースとなったが、今年も厳しい年であることにはまだ変わらない。それでも安全第一に、環境に配慮して、安定した操業を続けていけば明るさが見えると考えている」と語っていました。

この日、草田鉦山長から、金属鉦業事業団が石

油公団と統合して、「独立行政法人 石油天然ガス・金属鉦物資源機構」となることを聞きました。金属鉦業事業団に電話したら、調査部の中山 建調査部長が出て、鹿児島での広域調査が平成15年度で終了することを聞かされました。

【2003年2月6日】

キャスター ふるさと発信、きょうは川内報道室の森永記者と結んでお伝えします。森永さん、きょうは金山探しということで夢のあるお話なんですけど、金山探しはいま、どこで行われているのでしょうか。

記者 川内市と樋脇町で行われています。国の特殊法人金属鉦業事業団が毎年行っている広域調査です。今行われている地域は広域調査の空白地帯といわれたところなんです。と同時に鹿児島県では最後の広域調査になりそうなんです。最先端の科学技術を使って行われてきた、鹿児島での金山探しについてお伝えします。

— 中略。

キャスター 森永さん、金山探し、鹿児島では35年もの間、行われてきたんですね。

記者 はい、その間、貴重な資料が蓄積されてきたんですけど、その貴重な資料の一つがこれなんですけどね。

— 広域調査報告書を示して。

記者 毎年の調査の報告書です。どこでどのような調査を行い、その結果どんなことがわかったのか記録されています。掘り出された岩石、コアですね。これも保管されています。金山探しの調査はもう一つ精密調査というのもあるんですよ。鹿児島県の金山探しは一区切りしようとしているんですけどねえ。

キャスター わかりました。きょうは金山探しについて川内報道室の森永記者に伝えてもらいました。

このようにして、冒頭で紹介しました、2003(平成15)年3月13日のリポートへ続き、金山取材20年は終わりました。

MORINAGA Mitsuro (2004): Reports on the gold mines for 20 years.

<受付: 2004年8月4日>